

---

# トラウマッ子世に蔓延（はびこ）る

藍亜夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トラウマツ子世に蔓延<sup>はらう</sup>る

### 【Nコード】

N7606D

### 【作者名】

藍亜夢

### 【あらすじ】

過去のある出来事がきっかけで、ひねくれた性格になってしまった超美形男子高校生。容姿、学業、運動、性格、すべてを兼ね備えた完璧少女。その他個性的な面々が織り成すハチャメチャハートフルギャグコメディラブロマンス（注）ほとんどの登場人物が皆、なにかしらのものを抱えています。（コメディ＋シリアス）×恋愛みたいなコンセプトでやっていけたらいいな。中途半端に終わってしまったらスイマセン、あしからず。

## 第1話・甘酸っぱい思い出（前書き）

初投稿です。なるべく頑張って更新するようにしますので、拙い文章ですが、どうか温かい目でみてやって下さい。  
宜しくお願い致します。

## 第1話・甘酸っぱい思い出

「ゆうちゃん見つけ!」

「あっ! シマッタ、見つかったぁ~~~~!」

タッタッタッタッタッ

「あ~~~~みっちゃん、まってよ~~~~」

カコーン

「ゼエゼエ・・・ハアハア・・・やられたあゝグヤジいゝゝゝ!!」

「エッヘッへゝゝゝこれでまた、ゆうちゃんがオニだねゝ!」

「だって・・・みっちゃん足はやすぎなんだもん・・・ボクおいつけないよゝゝ」

タッタッタッタッタ

「オーイ!またユウがオニなのかゝゝゝ?」

「あつ カイ・・・どこにかくれてたんだよゝゝゝ?」

「あつちの木の上だよ」

「えゝゝゝゝ!そんなのありかよゝゝゝ!」

「カイくんは、きのぼりとくだもんねゝ?」

「ピース！」

「なんだよ・・・それって・・・」

「そんなことより、ユウ？おまえこれで、8かいれんぞくでオニだぞ〜〜〜」

「・・・・・・・・・・」

「ぶー、ツマンナイ・・・カンケリなんてちつともおもしろくない・・・ボク帰る！！」

「あっ！ ちょっとまってゆうちゃん！」  
「まてよ〜〜〜ユウ！」

「だって・・・・・・・・・・」

「それじゃあ、3にんでおままごとしよっ？ね？ゆうちゃんもカイくんも、それならいいし

よ？」

「えっ？ままごと！？ うん、べつにいいよ。ユウもそれでいいんだったら」

「え〜〜〜ままごとなんて、コドモのあそびだよ〜〜〜コドモッ！コドモッ！」

「だめ……かな？」

「しょうがナイな〜、みっちゃんがそんなにままごとしたいんだったら、やってあげよう！」

「うん！わたしおままごとすきだから、ねっ？あっちのすなばへレッツゴー！！」

タッタッタッタッタ

「よし！じゃあね〜そしたら、ボクが”おとうさん”やる！

みつちゃん”おかあさん” やって！ んでもって、カイは  
”あかちゃん” ！”

「はい あなた〜！」（ちゅっ）

「がーん！！！！なんで・みつちゃんユウに”ちゅっ”なんかし  
ちゃってんの〜？」

「”ふ〜ふ” だからだよ〜ん

「ユウ！おまえにきいてナイよ！」

「まあまあ、カイくん？おねがいだから・ね・・・」（ちゅ

「あっ！？・・・う、うん・・・わかったよ・・・」

「ありがとう！カイくん」



「きまり〜〜〜!」

「でも、そのかわりつきは、ぼくが ” おとうさん ” やるからね  
!ユウもそれでいいな?」

「わかったよ。そしたらカイが ” おとうさん ” ボクが ” おか  
あさん ” でみっちゃんが

” あかちゃん ” だね

「ガクツ・・・なんでそうなるかなあ・・・」

「きゃっははははははははっ!?!?!」

「ちょっと〜みっちゃんわらいすぎ〜」

「ぷっ くくくく・・・」

「・・・ユウまで・・・!?!? って、ぷっ!なんかぼくまでおか



## 第1話・甘酸っぱい思い出（後書き）

読んでいただきまして有難うございます。これから序々にコメディ色をだしていきたいと思います。

2、3日中には更新出来る？ような気がします（弱気

## 第2話・今まさしくそこにある危機（前書き）

何とか更新する事が出来ました。句読点が、かなりめちやくちゃで尚且つ、改行もあまり良くなかったので読み難いようでしたら申し訳ありません。

## 第2話・今まさしくそこにある危機

ぴぴぴぴぴ、ぴぴぴぴぴ

「……………うん……みっちゃん……ムニヤムニヤ……………」

「ハッ！……夢……か……」

「クソツタレ！最悪の目覚めだぜ！つたく……………」

（何度目だよ……こんな悪夢で朝を迎えなきゃなんなかったのは……  
……  
……  
なになが悲しくて、よりにもよってあんな奴らの夢を見なきゃなんねーんだ……）

俺はベッドから体を起こし、枕元、午前6時のアラームを解除する。  
そして、自室を気だるそうに移動しながら、

机の引き出しを開け、目当ての品物<sup>ブツ</sup>を手に取り中から1本出して火を点ける。

ジュポッ

「フーーーーー」

そして啞えタバコのまま、低い丸テーブル上の灰皿目指し二・三歩駒を進めた拍子に  
足に何かが当たった。

（空き缶？何故こんな所に・・・ああ思い出した、そういえば昨夜風呂上りに、親父のを  
拝借して飲みっぱで放っておいたんだっとな）

（空き缶・・・缶・・・・・・チツ！）

俺はその、〇〇〇ビールと表示してある350mlのアルミ缶を見て、沸々となにか例え様の無い苛立ちを覚え  
数回踏み潰した次の瞬間、無残に変形した”ソレ”を、思い切り何処に向けるでもなく蹴り付けていた。

ガコッ

すると”ソレ”は鈍い音を立てながら、一瞬で壁面の低い位置から跳ね返って、

俺の左足くるぶしを直撃したのだった。

その際に、思わず啞えてたタバコを下に落としてしまう。

「っ痛えええー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

俺は、激痛に顔を顰めながらやり場の無い怒りの矛先を、何処に向けてよいか解らず、例えるならば  
まるで反抗期の少年がはき捨てる様な口調で

「けっ！カンケリやママゴトなんて、所詮ガキのあそびじゃねえか！くそつたれ！！」

荒げた声は、自分以外誰も居る筈の無いであろう自室に空しく響き渡る。

ちなみに両親は、こんな俺に対し余程の事が無い限りは、自分達から特に何も言ってこない。

（俗に言う放任主義ってやつか？・・・・・・・・・・違うな、きっと呆れてんだろ・・・・・・  
いや、むしろ諦められてんのかも・・・・・・・・・・）

幾分か痛みが治まった俺は、こうしてても仕方が無いと思い、取り敢えずテーブル上の灰皿を持ちつつ、机の位置に対している小さな車輪付きの事務用椅子に腰掛ける。

そして次は

気を落ち着かせようと、おもむろに2本目のタバコに火を点け、先刻起きたアクシデントの被害状況（八つ当たりの代償）を確認する。

その1 壁に残った小さな傷+凹み

その2 赤く腫れあがった左足のくるぶし

その3 現在の気分

(まあ、こんなトコか・・・)

めでたく結論が出た所で、俺は切り替える為、短い間だった春休みの回想をする事にした。

(思えば、休みの間これといってダチとどっか遊びに行ったりするでも無く、かといって

独り街をぶらつく気分にもなれず。バイト先と家の往復ばかりだった様な気がするぜ

・・・・・・かといって別に気にしちゃいねえが。

ま、課題を出されなかった事がなによりだな。もっとも

高校生にもなつて春休みの宿題なんて、俺自身あまり聞いたコト無いが)

溜め息と共に吐き出す紫色の煙に自然と目がいく。果たして”ソレ

”は俺の予想通り

上に広がって、やがて音も無しに儚く消えてゆく。

(一応、今日から新学期なんだよな・・・人によっちゃあ、春は”始まりの季節”なんて



ほざいてるヤツラがいるけど、そんなもん俺に言わせりゃ知ったこと  
っちゃねえーてコト

まあ、強いて連中の言葉を借りてオレ流にアレンジすれば、  
正に ”ただカッタルイだけの日常の始まり” って訳)

「フわあゝゝ」

俺は、欠伸しながらフィルター部分まで残り少なくなってきたタバ  
コを掻き消し、感傷

に浸る作業を一旦中断して、登校の支度を整える。  
時計に目をやると、現在午前6時25分

(少しロスツたな・・・)

取り敢えず、クローゼットに掛けられているハンガー(ホコリ除け  
の透明ビニールが被さった濃紺のブレザー・若干丈の太い灰色のズ  
ボンの2点セット)とYシャツをそれぞれ手に取り、張り付いてる  
クリーニング屋の両方のタグを外していき着替えてゆく(その際Y  
シャツの胸ポケに予め品物を忍ばせておく)。終えたとその足でタ  
ンスに向かい、室内スリッパから靴下に履き替え、鞆を持ちさて出  
っ発という時に

(さつきから気にはなっていたが、4月だつてのにやけに暑い日だ  
な今日は・・・尋常じゃねえぞ!?)

この分じゃ昼間は季節外れの蝉が鳴くんじゃねえのか? フツそんな  
ワキヤねーか(笑)

等という有りもしない冗談・・・・・・・・・・もあながち  
的外れでは無かった事に気づく・・・・否! 気付かされる!!

何故ならば

「ヒイ」

[illegible]

~~~~~!!!!!!」

「かつ・か・かかか火事だあ~~~~!!?!?!?!?!?」

（ハイ オレ見事にテンパッテマス、ミトメマス。ドウもスイマセン）

つてヤバイ！ヤバイ！ヤバイ！ヤバイ！ 自己分析してるバヤいじゃねえぞ！）

（そつ、そうだ！ 俺が今、手に持つてる鞆で叩いて消せばなんとか・・・

いや！ 無理だ、火の勢が強すぎて近づくこともままならねえ！  
）

（だが、何でこんな事になっちまった・・・？さっきまでのシリアスな俺は一体全体  
何処に行っちゃったんだ！？ じゃなくて原因だよ！、火事の原因  
！）

冴えない1人ツツコミもそこそこに、俺は必死に僅か20分前後の記憶を  
引っ張り出そうとする。が目の前の逼迫ひっぱくした状況が容赦なくこの俺から  
思考力を奪い取っていく・・・

（落ち着け自分！そうだ、こんな時こそ一服して・・・！！）

その直後、俺は悟った。すべて理解した・・・

（今吸おうとしたタバコが、確か今日3本目・・・2本目はしっ  
かり

灰皿で掻き消した筈だからこれも原因ではない・・・残されたのは・・・

・

・・・そう！ズバリ・・・寝起きの啜えタバコにあったのだ！！！！

あの時俺は、空き缶に腹を立て壁から強烈な”しっぺ返し”を  
喰らい

その際啜えていたタバコをカーペットに落つことしていた！！！！  
！！

間抜けな俺は、その事に全く気づかずほったらかしにしたまま、転  
がっている

”ソレ”が、カーペットに引火し今に至る。）

大方、こんなところだろう・・・

俺は思わず天を仰ぐ・・・  
なんてこった  
JESUS！  
と



## 第2話・今まさしくそこにある危機（後書き）

この第2話は、作者本人の実体験が元ネタとなっています。これを読んで下さっている方も、火の不始末にはくれぐれもお気を付け下さい。

それと、本文最後のJESUSは（ジーザス）と読ませます。”

救い主 ” といったニュアンス

でよく昔のアメリカ映画等で、登場人物が自分ではどうする事も出来ない事態に陥った際、

呆然とした時使う言葉だったかと記憶しています。（間違いだったらすイマセン）

### 第3話・部屋とYシャツと鬼子母神（前書き）

若干、長めでクドイ文章になってしまいました。  
苦手な方は、ご注意下さい。

### 第3話・部屋とYシャツと鬼子母神

く前話からの続き

身から出た錆<sup>サビ</sup>とはいえ、自身の不注意から危機的状況に追い込まれてる俺。

（それにしても、こんなになるまで気づかないオレっていたい・・・）

振り返っても後の祭り。もはや、一刻の猶予も許されない。

何故なら、迫り来る炎だけではないもう一つの難問が、俺に襲い掛かっているからだ。

「ウツ！ ゲホツゴホツ」（窓だ！ まず窓を開けてこの煙を何とかしねえと・・・）

袖で、鼻と口を覆いつつ素早く窓を全開にする。

そして俺は、脱兎の如く部屋から退避し階段を駆け降りて！と、あっそうそう、俺の部屋は

2階にあるのでした~~~~つ・・・て（我ながら危機感ゼロだなオイ）



「モモちゃん！ 火事だ！ 火事！ オレの部屋が燃えてんだYO  
おー！ー！！」

キッチンで、朝食の準備をしていたとおぼしき我が愛しのマイマザ  
ーは、俺の言葉を  
聞くや否やダツシユでバスルームに向かって行く。すかさず俺もそ  
の後について行き、  
二つ重ねにしてあるバケツの片割れを無言で俺によこすと、すぐに  
彼女は浴槽の残り湯（水）をバケツ一杯汲み取り、凄い勢いで二階  
へと駆け上がって行くのだった。  
慌てて俺も後に続く。

途中、（うわっ！ スゲー煙<sup>ケム</sup>イ！ ハンパねエなこりや・・・）

『げほっ！ ごほっ！』 「ゲホッ ゲホッ！」

煙に悩まされながら何とか現場に到着した俺達は、バケツの中身を  
火元に向けてそれぞれ  
ぶちまける。

ザバアッ  
バシャッ

オフクロと俺の的確な処置と連携が功を奏し、何とか鎮火する事が  
出来た様だ。

不幸中の幸いか、机上のデスクトップ・部屋の隅に位置する20インチ薄型液晶テレビ・エアコン  
といったMY三種の神器もどうやら無事らしい。念の為それぞれ動作確認もした、間違いない。  
やれやれとほっと胸を撫で下ろしたのも束の間・・・

『この大馬鹿者があああああ！！！！ 一体これ（惨状）はどうゆう訳かあああ！！！！！！』

俺の耳元で、軽く鼓膜を何十枚も突き破れそうな数百db<sup>デシベル</sup>もの大音量を発する

この御方こそ、姓は度会<sup>わたらい</sup> 名は桃代<sup>ももよ</sup> 身長173cm 体重チヨメチヨメ（知ったら最後その日が命日）kg

3サイズ上からB95 Wズキーン H92 血液型A型、実年齢36歳見た目どうみても20代前半、街を歩けば

すれ違う人のほとんどが、二度見せずにはいられ無くなる程？の圧倒的な美貌で、誰が名付けたか知らないが

通称” 見返りモモちゃん ” として高校在学中に颯爽と芸能界デビューを果たし、一世を風靡した後<sup>のち</sup>

卒業後、当時史上最年少でミスユニバース日本代表に選出され、世界大会でも見事第3位に輝く等の実績を残した  
というのはあくまでも表の顔。

果たしてその実態は・・・・・・・・・・

次号に続く！・・・

ウソです、スンマソン・・・ちゃんとしませう、ハイ。

果たしてその実態は・・・・・・握力 右98 左87 背筋 2

66 の右利き、ストリートファイト・腕相撲等、過去

数百戦無敗（相手は男女問わず） 柔道・剣道・空手・テコンドー・

少林寺拳法・その他諸々の武道を極め、

それ等の段位を合計すると軽く30は超える。俺にとって母親であることは勿論、時には姉貴代わり、

またある時は人生の師匠といった存在。あと怒らせたらマジ、シャレになんないって事も付け加えとく。

（俺はきつとこの女には、一生頭が上がないんだろっな・・・）

モモちゃん（オフクロ）に関しての説明について、今日の所はこの辺で勘弁してくれ・・・いずれまた次の機会に・・・

『ところで、其の方先程から一体誰に話しかけておる？』

「ゼエ・・・ゼエ・・・」（今、モモちゃん何か言ってたか？・・・つか、こちとら説明疲れでそれドコじゃねーし）

『ご苦労な事だ・・・』

「あつそうだ、こんな事してる場合じゃなかった！俺、これから始業式出なきゃなんねーからさ？モモちゃん、悪いけどこの部屋の後始末ヨロシク！！」

「んじゃそーゆーコトで」と言いつつ俺が自室から出て行こうとするのを、オフクロが見逃す筈も無く

『待て！私はまだ、このボヤ騒ぎの理由を聞いてはおらぬぞ？まあ、おおよその見当は付いておるが

・・・それより何だ！その態度は？反省の色が全く見受けられん！！！』

あっけなく襟首を掴まれ、凄い勢いで後ろに引き戻されるオレ

「ウゲエ〜〜〜！ モモちゃん・・・絞まるっ・・・ノ、ノドが絞ま  
って・・・く、苦し・・・」

『まったく、大袈裟な』

ようやく解放してくれたかと思った矢先、オフクロは素早く俺の前  
方にまわり込み、仁王立ちで部屋の出口に立ち塞がる。そして間髪  
入れず、なんと俺の懐に手をつ突っ込んできた。

「えっ！？ ちょ ちよつと待ってくれモモちゃん！ 朝っぱらか  
らそんな・・・御無体な・・・  
オレ、近親相姦の気はねえから！！」

『愚か者！ 私は自分の息子を襲う程落ちぶれてはおらぬわ！！』

ズビシッ

「ぐおおおお〜〜〜〜！！！！」

どうやら脳天に手刀を喰らったらしい・・・重い衝撃が、頭部全体  
を襲う。

夜でもないのにホシが見えるのは気のせいか・・・  
だが、これでもある程度は手加減してくれてるのは間違い無い。（  
本気のももちゃんはこんなモンじゃないからな・・・）

ちなみに、未だオフクロの右手は俺の懷から離れてくれない。まるで何かを探そうとしてる様な手の動き、この状況は俺にとって・・・

（ヤバイ！ x10 …… ”アレ”が見つかったまう！  
・・・非常にマズイ！！ ってああ～＼シャツのポケットを触らないで  
～～ママったら～～）

そうこうしてる内、ついにオフクロはお目当てのブツを探り当てたらしく、すかさずソレを

” 喰われかけの哀れな子羊 ” の前に突きつける。

（うわ～～～このヒト微笑んでる～～出たよ必殺っ” モモちゃんスマイル” ～目は決して微笑んでいないバージョン～が・・・  
終わった・・・…何かも・・・俺の16年余りの短い人生・・・  
父上様、母上様、先立つ不幸をお許し下さい・・・あっ、もっとも目の前のアンタが手を下そうとしてんだけどネ）

そして・・・

「これはなんだ？」 と目の前に見せ付けられたのはまさしく

” 処刑台への片道切符 ” (SEVE STAR BOX)!!

「む、むむむ・・・」

『む?』

「昔懐かしの ” シガレットチョコ ” だぴょん!」

『ほう? そうか・・・貴様にはこれがチョコに見えると・・・  
ならば早速食してみるか? ん?』

「モモちゃんスマイル」く般若バージョンくで強烈なプレッシャーを

俺に与えてくるオフクロ。

同時に、俺の目前に掴まれている”チョコ”を彼女が軽く握り潰す。  
まるでティッシュペーパーを丸めるかの如く、いとも簡単に・・・

(あのく、もしもし? ”ソレ” もはや原形留めてナインすけど・・・

てかオレ初めて見たよ、タバコがゴルフボールに変わってくイリュージョンを・・・

そして、これは同時にオフクロが俺に向けてのメッセージであるという事を意味する。

次にこうなるのは キサマ だと!!・・・

（キャ～～～！ ムスコを”貴様”呼ばわりですか？ イヤ～～、  
貴女はわたくしを  
一体どうなさるおつもり！？ ～～～ そんなに怖い表情かおなさらないで～～～  
せっかくの美貌が台無しよ？ ～～～）

こうして馬鹿やってる間にも、状況は刻一刻と悪化してるのは自分でも分かってるつもりだ。

（何か有効な打開策はないものか・・・ここでオレに残された選択肢は・・・）

- 1 無謀を承知で出口に立ち塞がる ”人類最凶殺戮破壊兵器”  
モモちゃん
- 2 誠心誠意、心からの謝罪をして許しを請う
- 3 開け放たれている後方の窓からの華麗なる大脱出

以上！（少なさ！ どんだけ～？ 選択肢、こんだけ～！？）



まあ仕方無いので、現時点この3パターンをそれぞれシュミレートしてみる。

まず1番……ってバカア！！オマエ 作者馬鹿だろう！？そうまでしてオレをコロシタイノ？

物語終わっちゃうYO？ 問答無用で却下  
！！

で2番……うん、まあ正面突破に比べれば遥かに常識的かつ良心的な答えか？

モモちゃん優しいから、きつと骨の2・3本で許してくれるかも……

でも問題はそう、誠心誠意の謝罪って事は〃  
十中八九土下座っしょ？

床、ビッチヨリよ？ せっかく着替えたのに濡れちゃうよ？ ま、死ぬよりマシだけどサ

いよいよ3番……これは問題点多いよ、脱出って言うケドここ2階だぜ？華麗なる脱出ならぬ”転落”だよな間違い無く

アンタ 作者、オレの運動神経分かってる？ 良くて骨折、悪けりゃ全身打撲で即入院コースよ？

それに、運良く飛び降りた際のダメージが少なかったと仮定してよ？

その後オレどうやって登校すんの？ 靴も履

かずに？ 1階も玄関も全部鍵掛かってんだぜ！？

そしてオレが最も恐れている最悪のシナリオ、それは窓までたどり着く間に起こる・・・

えっ？たかだか数メートルの距離だろって？

ハア~~~~<sup>バカ</sup>作者はこれだから困る・・・

言っただでしょ！床ビツチヨビチヨなのよ？

カーペットも水気を含んで、ただでさえ滑りやすく

なってるの！しかもその先は水浸しの”フロ

ーリングゾーン”ですけど？すってんコロリンって

ピーチ姫に簡単に捕まっちゃうYO！ そう

なったら酷いヨ、ピーチってば卑怯な事が大っキライだから

想像しただけで・・・・・・・・・・ギャア

—————！！！！

結局どの案もとても実行する気にはなれず、かといってこうしていても仕方無いと思い、

遂に俺は自分の中である決断を下す。

（こうなったらもう”アレ”使うしかねえな・・・しかし後々スゲー不安だな、なんたって実戦で使うのは初めてだもんな・・・  
オレ自身、使用後どうなっちゃうのか全く想像つかないが・・・  
いや！ 迷ってるヒマはねえ！今はこの窮地を逃れるのが最優先事項だ！ やってやる！！）

「禁断奥義・・・」  
「<sup>マイムマイム</sup>魔胃夢間井無」！！！」

「???」

説明しよう、この術を唱えた者は自己の精神力を急激に引き上げ、  
<sup>リミッター</sup>限界点を突破させると同時に一種のトランス状態に陥り、正に”天上天下唯我独尊”を地でいける程、手が付けられなくなるとゆう怖ろしい技なのである！（まあ早い話が相手<sup>モモちゃん</sup>に対して常に上から視線で絶対的優位に立てるってワケ）

だがこの技は、あくまでも自身のメンタル限定の効果な為、（お空をとんだり、カハメ波出したり、大型トレーラー持ち上げたり）だといった肉体的、超人的な活躍は無論、一切期待出来ない。  
・・・シヨボツ！

尚、この技は術者の身体にとてつもない負担が掛かる故、使う場面が非常に限られる。ちなみに技のネーミングと効果・小説のストーリー・登場人物のアイデンティティー・等との関連性は一切無い・

主人公

「お遊びはここまでだピーちゃん！ この我輩をここまで追い込ん

だのは、あんさんが初めてや！……よかろう！ 見せてみよう！ うぬの真のチカラを！！ ボクちゃんの持てる全てのポテンシャルでYOUを可愛がってあげよう……カモン！Pちゃん！！」

『さつきから黙って聞いておれば、男のくせに キャー、イヤーンだの ウツーン だの……訳の分からぬ事をブツブツと……あげくの果てに親に対して数々の暴言……これは教育的指導<sup>キ</sup>が必要な様だな！！……』

「え？ 何でPはオレが思ってるコトが分かるんだ？ オレもしかして、第3話の最初から全部口にした？」

『ああ出ていたさ！ ……って？ ちょっと待て！ お前、今”P”と言ったか？ 私<sup>レ</sup>の事を”P”と！？』

「言っただけど、それが何か？」

『そ・それが何か？ だと貴様……！ ”P”だぞ！ ”P”！？ もはや”度会桃代<sup>フルネーム</sup>”のカケラすら留めておらぬではないか！？』

「ああ、そういえば”P”は元世界ミスユニバース3位だったっけな……やっぱ、グランプリじゃないと納得いかないか？」

『全く会話が噛み合って無いではないか!? 今はその様な話をしておるのでは無い! 何故私がよりにもよって、息子のお前から”P”、”P”言われなくてはならんだ!?』

「マツタク・・・Pって、ホンとノリ悪いな」グランプリ取れなかったんだカラ、それなりのリアクションってもんがあるだろ? ハイ! LOOK、LOOK、注目!・・・例えばこういう風に、顔を思いっきり歪ませて・・・「M グランプリ取れなくて非常にクヤシいですっ!!」ってな具合に・・・そんなんだから”P”はいつまで経っても、ピ（自主規制）が、ピ（この小説は15禁なんでアシカラズ）で、ピ（だからムリなんだってば!）のまんまなんだYO!! 解ったか? P?」

ブチッ

『覚・悟・は・よ・い・な?』

「いいともお~~~~~!!・・・・・・って、あ、あれ?」  
「（急に全身を激しい脱力感が・・・）」

（なんかクラクラしてきた・・・耳鳴りもする・・・・・・そうか

！・・・副作用ってやつだな、どうやら”魔胃夢間井無”<sup>マイムマイム</sup>の効果  
完全に切れたらしい・・・いつの間にか視界も真っ暗だし・・・

俺は、自身が前のめりに倒れ込んでいくを感じる。（このまま  
じゃ・・・いゝや・・・もう煮るなり、焼くなり・・・ど・・・う・  
にで・・・も・・・）

『？・・・お・おい！ 優斗？ 一体どうした！？』

（・・・・・・・・？）

どうやらモモちゃんが、俺を抱きとめてくれたらしい。心配してく  
れている雰囲気は十分に判る。顔面から床に激突する事態は、回避  
できたみたいだ。代わりに、大きくて張りのある柔らかいバストが、  
顔全体を優しく覆っているのを感じる・・・と同時に頭から首筋に  
掛けて、モモちゃんの長くて艶のある黒髪が包み込んでいる事もお  
そらく・・・

（もしかして、オレ・・・たすかった・・・の・・・か？）

すっかり安堵しきった俺は、”モモちゃんスマイル”（聖母バー  
ジョン）を感じ取りながら安らかな眠りにつくのであった。

『ふう、まったく世話の焼ける息子だ・・・一時はどうなる事かと・・・』

今朝の教訓（おさらい）

- ・ 思ってる事をなんでもかんでも口に出さない
- ・ モモちゃんに向かつて”P”は禁句
- ・ 主人公の名前が”優斗”だという事が判明  
マインマイン
- ・ ”魔胃夢間井無”（単なる挑発）は今後封印
- ・ 自室に消火器は必須

モモちゃん『禁煙せい！』

優斗「ムリ！」（即答）

モモちゃん『いつその事、スプリンクラーでも付けるか？』

優斗「それだけのご勘弁を・・・」

モモちゃん『いや・・・お前にではなく、あの男にだ！』

「作者<sup>オレ</sup>かいつ！？」



優斗「よう、馬鹿作者！」

作者「てめえ・・・作者をつかまえて開口一番バカとはなんだ

！」

モモちゃん「私も優斗の意見に賛成なのだが・・・」

作者「<sup>オレ</sup>”P”まで・・・」

ドゴ！バキッ！グシャ！ガス！ゴス！

作者「<sup>オレ</sup>あれ~~~~~！」

優斗「おっ！飛んでった~~~~めでたしめでたし」













### 第3話・部屋とYシャツと鬼子母神（後書き）

やってしまいました・．．いろんな意味で・．．  
もうこうなりや、後は野となれ山となれってな具合に・．．スイマ  
セン！ホント調子こいてどうもすいませんでした！！ 何か謝って  
ばかりだな作者<sup>オレ</sup>



#### 第4話・満たされないひと時（前書き）

今回は少し抑え気味にしました。

## 第4話・満たされないひと時

「フぁ~~~~、よく寝た~~~~」

久しぶりの心地よい目覚め。正に気分爽快の筈が・・・

（あれ？ オレなんで、寝巻き姿に？ いつの間に着替えたんだ？  
・・・）

辺りを見渡すと、何故かそこはリビング。時刻は昼の11時18分、  
即ち GAME OVER

「はぁー・・・」（ハイ、ハイ何となく分かってはいたさ・  
・コリヤ完璧に遅刻だ、イヤ最早そういうレベルを通り越してるな  
・・）

『優斗！ 風呂沸かしといたから、さっさと入ってこい！』

キッチンから声が掛かる。

「モモちゃ〜ん！ オレ何でパジャマなんだよ〜？ それに居るん  
だったら、起こしてくれよ〜 5時間近くも放置プレイはマジカン  
ベンだぜ〜〜」

少し間が空く

『何、寝ぼけておる？ 新聞をみてみる、新聞を・・・』

言われて渋々、朝刊を手取る

（はぁ・・・ったく・・・えつとくなになに・・・  
原油価格が史上最高値更新？・・・あつそ、・・・スポーツ  
欄はと・・・プロ野球の結果？・・・別に興味ねえし・・・何か面  
白い番組はないかな〜と・・・アッ！？）

「 4月8日火曜日い〜〜〜〜！？ う、嘘だろ・・・？ 」

（5時間どころか、よりによって丸一日以上もぶっ通しで眠ってた  
のか・・・オレは？ でもこんなになるまで何故・・・）

モモちゃんに抗議しようとするも、まるで先手を打ったように

『 起こそうとはしたぞ？ 叩いたり、揺すったり、関節極めたり・  
・・・だがそんな事もお構いなしに、お前は爆睡しおってからに・・・  
さすがの私もお手上げた 』

（何かちょっと3つ目の単語がめっちゃ気になるんスケド？ ” 関節” って・・・）

そういえば、体のあちこちが痛む。昨日の激闘のせいだけでは無いのは確かだ。たいした事はない、それよりむしろ汗が乾いて全身が気持ち悪い事の方が、俺には我慢ならなかった。

そうこうしてる内に、エプロン着けたモモちゃんがキッチンから姿を現し

『いいから早いところ、一風呂浴びてこい！ 二度は言わんぞ！』

声のトーンは、多少不機嫌モードが入っている。

「分かったよ！ あ、でもその前に確かめておきたい事があるんだケド？」

『何だ？』

「オレが寝てる間、パジャマに着替えさせてくれたのひょっとしてモモちゃん？」

先刻から気になってた疑問をぶつけてみる。

『・・・そうだが・・・だっ、だとしたら！　それが、な、何だというのだ！』

（何故、顔を赤らめる？）

「いや、別にちょっと気になったただけだから！　あんまし深く考えないでよ？　ねっ？」

收拾が付かなくなりそうなので、この話題はお開きにしておとなしくバスルームへ向かう事にする。

洗面所には、丁寧にたたまれた真新しい下着類がカゴの中に、アイロン掛けしてある制服とYシャツがハンガーにといった具合にそれぞれ準備してあった。風呂上りにこれを着て行けという事らしい。

（こいつは有難い）

俺はモモちゃんのさり気ない気遣いに感謝しつつ、着ていた衣類を片っ端から洗濯機にぶち込みバスルームの中へと足を踏み入れる。

（まずはこのベトベトの体を何とかしねえとな・・・）

育毛剤入りのシャンプー（別に親父もオレもハゲてはない！ 断じて！！ あくまでも将来的な視野を見据えて）で髪を、フレグランス（香水入り）ボディソープで全身の順に洗い流し、浴槽に浸かる。

温泉成分配合の入浴剤の匂いが、鼻孔を擦る。<sup>くすぐ</sup>若干香料が効かせてあるらしい。

（温泉といえば、昔よく家族みんなで行ったよなあ　今度オレの方から誘ってみようか？ いや、やめとこう・・・モモちゃんはある見えて、家事やちよくちよく問題起こすオレの事とかで気の休まるヒマ無いだろうし、親父の方も仕事忙しそうだし、無理言って困らせる歳でもねえからな・・・）

（でも楽しかったな、あの頃は・・・家族4人で・・・・・・くそっ！　なんで今更あんな奴の事を考える？　いかん、いかん、別の事を考えろ！ 別の事を・・・）

「はあ　　たまらん、正に今至福の時だぜ・・・」

全く実感の湧かない独り言を無理に呟く。　余談だが、湯に浸かっている際におそらく日本人の3・4人に1人は口にするであろう、“いい湯だな”・“極楽、極楽”等といった言葉は俺的により好まない。だから何だ？と言われてしまえば、それまでだが・・・

（不毛だな、もう出るとするか・・・）

これ以上、今の俺にとってあまり居心地が良くないこの場に居たら、また余計な事を考えずに要らなくなる恐れがある。

”カラスの行水”も程々にして、俺はバスルームを後にする事にした。

「家族みんなで」か・・・」

蛇口から滴り落ちる水滴に、掻き消されそうな一言を残して。





#### 第4話・満たされないひと時（後書き）

ここまで”主人公”と”モモちゃん”だけで話を引っ張ってききましたが、さすがに辛くなってきたので次話あたり新顔を入れたいと思います。

## 第5話・Little devil & Satan(前書き)

後々のストーリー上、ある程度重要なフリになる(予定)ですので  
自分なりに、少し気合入れて書き上げました。

3月29日、本文を若干修正しました。

## 第5話・Little devil & Satan

今、俺は風呂から上がってリビングにいる。

モモちゃんは、相変わらずなぜか機嫌が悪い。

お世辞にも精神衛生上、あまりいい雰囲気とは言い難いと察した俺は、当たり前障りの無い話題を振る事にした。

「そういえば、もう最近暖かくなってきたよね？ さすがに春なんだなって」

『そうだな・・・だが、お前のようなやつが増えて困るのも頂けないがな・・・』

（そうくるか・・・）

「モモちゃんひっでー！ そうやって純粋で無垢のいたいけな美少年をからかって何が楽しいのさ？」

『どこの世界に煙草の不始末で、部屋を半焼させる純粋で無垢のいたいけな高校生がいるのだ？』

（あれ？ オレが言った最後ん所はスルーなんだ・・・ナンカ悲シクね？）

『まあ、やってしまった物は仕方が無い・・・それより、学校の方はどうするのだ？　こうしてる間にも、時間は刻々と過ぎていくのだぞ？』

（ハイ、仰る通りでゴザイマス・・・）

モモちゃんの正論攻めになす術が無い俺は、大人しく登校の準備を急ぐ事にする。

（といつても、制服は着てるし後は椅子の場所に転がってる鞆を持って、出発するだけなんだけどな）

「じゃ、そろそろ・・・」

鞆を持ち、さあリビングを出て行こうかと言う時に

ぐう

およそ、生きとし行ける者全てが避けて通れない生理的欲求が、俺の腹から素敵な音色となって現れる。

（あつちやゝ！　よりによって、こんなタイミングでかよ・・・そういや一昨日の晩から、何にも食ってなかったな・・・）

『・・・玄関で待ってる』

とモモちゃんはキッチンへ入って行く

「うん・・・」

これが学校でなくて良かったと、少しホッとしつつ玄関に移動し、靴を履き待っている俺。

程なく、モモちゃんが弁当箱らしき包みと、なぜか四つ折の紙を持ってそれ等を俺に渡す。

「サンキュ、学校着いてからゆっくり食うよ！　であとコレ、この紙一体何なの？」

『ああ、言つの忘れておったが昨日の夕方に、私が買い物から帰るとFAXが届いててな、どうやらお前宛てらしいぞ』

「そうなの？　ふん・・・」

俺はたいして気にも留めずに、紙を無造作にポケットに突っ込む。

『見てかなくていいのか？』

「いいよ、後で確認するし、そんじゃオレ行ってくつからう！」

怪訝な顔をするモモちゃんを残し、俺は自宅を出る。

（はあ、こっからがシンドイんだよな・・・）

自転車をこぐペダルが、<sup>みどりがさき</sup>やけに重たく感じられる。

何といっても俺が住む緑ヶ崎市の自宅から高校まで、大体30km以上の距離がある。

（まず、駅までチャリで約20分、そこから電車を三駅、最後にスクールバスで15分少々・・・もつと自宅から近く、楽に通学出来るトコもあつたろうに・・・マツタクもって、ホント頭が下がるよオレ自身に・・・ま、自分で決めたコトだから仕方無いっちゃ、そうなんだけどな・・・）

やがて何とか、“最初の目的地”に到達した俺は、月極で契約してる近場の自転車置き場でチャリに鍵掛け、構内の改札を通り、上りのホームにて電車を待つ。

来るまで13分あるらしい。（やっぱ、今の内腹ごしらえしとくか・・・）

傍の自販機で無糖の缶コーヒーを買い、近くのベンチに腰掛ける。そして、おもむろに鞆から弁当箱を取り出し、包みを解きフタを開けて中身に手を付ける。

（相変わらず、モモちゃんの弁当はいつ見ても美味そうだ、定番の出汁巻き卵や海老フライはもちろんの事、ごぼうの牛肉巻き、かぼちゃの煮付け、磯辺揚げ、等の脇役陣も花を添える。こういった才子ソドックスな品々でも、愛情を込め手間隙掛けた料理は自然と、人を幸せな気持ちにさせてくれる）

「もぐもぐ・・・うん、こりや中々・・・こつちも・・・はむほむ、いいカンジだな」

「モモちゃん、ごっそうさん!!」

俺はすっかり満足して弁当を平らげると、その時丁度いいタイミングで電車がやって来た。

ドアが開き、そのまま乗り込む。

（朝と違って、やっぱりこの時間帯は空いてていいな・・・座れるし、なんつっても楽し）

窓枠の背もたれに片肘を掛け、缶コーヒーを飲みながら、つかの間のまったり感を満喫する。

20分ほど後

まもなく米戸部<sup>よどべ</sup>ー、米戸部です

車両内アナウンスで、無情にも俺の貴重な”安らぎタイム”は、そこで終了を告げられる。

数十秒後、米戸部駅に停車した車両のドアが開く。

そして床に飲み干した空き缶を放っぽって、俺は下車した。

学校行きのバスは、乗客が俺1人（当然ながら）という事意外、特

に変わった事も無くそのまま最終目的地に駒を進める。

「着いたか・・・」

”県立米戸部第一高等学校前”と表示されたバス停で降車した俺は、校内の時計塔に目を向ける。

（午後1時26分・・・やばいな、もうとくに5限が始まってるじゃねえか・・・ そっいえば運動場で体育の授業中のクラスを除いて、他は静かなもんだ・・・）

どうせ今更慌てた所で、どうしようも無いと思い、俺は通常のペースで校舎目指し歩みを進める。

?? 『<sup>よこへ</sup>県立米戸部第一高校、通称”ヨドイチ”又は”米戸高”。

全日制普通科の公立高、偏差値は県全体で中の下。

全学年の生徒総数473名、内訳は、一般ピープル65%、

優等生、体育会系、オタツキー、それぞれ10%

ヤンキー4%、アウトロー（変人）1%、生徒会は存在するも、<sup>ほとん</sup>殆ど機能せず。

部活動は陸上部やソフトボール部等、一部の運動系を除いて特に目立った実績は無し。

近年稀に見る少子化傾向の煽りで、生徒数が少ない事以外、どこにもあるいたって普通のガッコ〜ぼよん



以上！ 説明はこんなトコだダ〜ン！！ 』

「のわっ！？・・・で、テメエ、一体何時から居やがった！？」

（うわゝ、サイアクだ・・・来て早々、とんでもない奴に捕まっちゃった・・・）

？？『ほえ？いつからって？そんなの決まってるポヨン ゆうとがバスから降りて、校門に入って来たときからだダ〜ン』

（こんなマネする奴は、オレの知りうる限りアイツしか考えられん・・・しかし何所<sup>トコ</sup>から、どうツツこんで良いやら・・・）

「・・・あのな、瞳子？ お前、全然気配無かったぞ？ あと、今授業中だろ？ 大遅刻してきたオレが言うのもなんだけど、お前何故こんな所うろついてんだよ？ それと、目のやり場に困るその服装！ なんて一昔前に流行った、某美少女戦隊アニメヒロインの格好してんだよ！ ここは場末のイメクラかつての！ 学校にコスプレして来てはイケマセンで、周りの人に教わらなかつたか？ 親御さんが泣くぞ？ 最後に、オレが何時<sup>いつ</sup>お前に”米戸高”についての説明を求めたよ？ つーか、そもそも”アウトロー”（変人）のお前なんか、偉<sup>ゑ</sup>そうに講釈されたくナイつての！！」

（オレの目前に、上目使いでこちらを見据える、小柄で華奢なツインテールの女の子・・・本名、松延瞳子<sup>まつのへんとうこ</sup> 言葉遣いや、たたずまい

がいやが上にも精神年齢の幼さを窺<sup>うかが</sup>わせる・・・コイツとは中学の時からのつきあいで、一応<sup>タメ</sup>同学年である。まあ男のオレから見ても、その小動物を連想させるつぶらな瞳、ピンク色した可愛いほっぺで、”守ってやりたいオーラ”を全身から撒き散らす、”米戸高の男共が彼女にしたい娘No2”（オレ的にはカンベン）に位置する存在だ。  
・・・そのモンダイの瞳子姫が・・・

『そんな・・・うつく、グスッ・・・』

（ヤバッ！ こんな場面<sup>トコ</sup>誰か（特に野郎共）に見つかったら、10パー俺悪者やん・・・てか消サレテシマウ・・・）

「あ、あの、瞳子！？ オレ言い過ぎた！わ、悪かつ・・・」

『そんな・・・そんなにいつぺん色んなコト聞かれても、ワタシ馬鹿だから分かんないよー！！ 1コずつ質問してよー！！  
！ゆうとのバカア~~~~ うわあ~~~~ん！！！！』

（なんですと？・・・つーか、怒るポイント”そこ”かいっ！）

（そもそも、自分で自分を”馬鹿”と言い切ったオンナに、すかさず”バカ”呼ばわりされる屈辱・・・）

あまりの理不尽さに、もはやブチギレ寸前の俺。

（く~~~~！！・・・もうこうなったら、たとえ女・子供といえど容赦しねえぞ~~~~！！ ここはガツンと一発このアマにかましたら

あ~~~~~！！！！）

「瞳子！ こっち来い！」

『ヒッ！・・・な、なにポヨン！？』

肩をビクつかせ、まるで怯えた子猫の様に返す瞳子。

「いいから、来い！」

『・・・・・・』

俺に言われ、恐る恐るこちらに近寄る瞳子。

「目を瞑れ・・・、そして歯を食いしばれ！」（よし！）  
「ター  
ゲット” ROCK ON！！」

「いいか？ 瞳子・・・よく聞いてくれ、あまり人と面と向かって  
軽々しく”バカ”って言うもんじゃないぞ？ それにな・・・さっ  
きお前は自分に対してもその言葉を使ったな？ でもさ、オレは決  
して瞳子の事そんな風に思っちゃいないぜ？ 何故なら、あれだけ

米戸高についての詳細をすらすると俺に語ってくれたじゃないか・  
・頭悪い奴にあんなマネ出来る訳ない、そうだろう？ もっと自分  
に自信を持ってくれよ・・・な？」

俺は、なるべく優しく語り掛け、ついでに彼女の頭もそつと撫でて  
やる。

『優斗・・・』

瞳子はいさつきまで肩を震わせていた事が、信じられない位今、  
俺に身体をあずけてきてる。何故なら、彼女の両腕がオレの背中に  
まわっているからだ。

（こいつ、ほんと身体小さいな・・・俺の胸板に顔がすっかり埋ま  
っちまって・・・腕もこんなに細くて・・・ホント、抱きしめたら  
壊れちまいそうだよ・・・）

『優斗の胸板つて不思議と落ち着く・・・それに、なんだかいい匂  
いもする・・・』

「えっ？ あ、ああ出掛けに風呂入ってきたからかな、ハ、ハハハ・  
・・・」

（ドキッとさせんなよ・・・柄にもなく、動揺しちまったじゃねえ  
か・・・）

『あれ？ 今ひよつとして、心臓の音が聞こえたような気がしたポ

ヨソ？  
『

（しまった・・・）

「さ、さあな・・・き、気のせいじゃねえの？」

我ながら苦しい言い訳、瞳子はそんな俺に対し悪戯っぽい笑みを浮かべつつ

『へえ・・・だったら、こんなコトしちゃおうかなブンブン？

』

ぎゅう

（む・ム・胸が、小ぶりだが中身はさぞかし形の整った”ロケット”が・・・ひょえ～～～は、早まっちゃ、い、いかんぞ？ 瞳子君？！）

『フフフ・・・ゆうとつてば、お顔まっ赤っ赤あ～～～！』

「ギブ！、ギブアップ！、本当オレが悪かった～～～！ もう堪忍してくれえ～～～！！！！」

『分かればよろし～～～』

そう言っで瞳子は、ようやく俺を解放してくれた。

（ナンで謝ってんだよ、オレ！？ いつの間にか、立場逆転してるし・・・）

『ねえ？ ドキドキしたカニ？』

（キィ〜〜、憎たらしいったらありやしない！）

「ブワァ〜〜カ！ 誰がお子ちゃまに興奮するかっての！ 顔洗って、出直してこい！」

『あ〜〜！ ワタシに”バカ”って言ったあ〜〜 ひどいプリン！ さっきの「瞳子の事そんな風に思っちゃいけないぜ？」や「もつと自分に自信を持ってくれよ」とか、あれ全部ウソだったのポヨン??』

「チゲーよ、よく聞いてるよ！ 今オレは、”ブワァ〜〜カ！”って言ったの！ まったく、ブワァ〜〜カ！ に付ける薬ナシだぜ（しみじみ）・・・」

『コドモみたいだポヨン・・・』

（ガーン！！・・・お子ちゃまに”コドモ”言われてもた・・・オレ様のプライドが・・・もうこうなったら！！！！・・・）

（アレつかお～～と）

前フリ省略、説明後述  
「生活習慣！！！」  
”駄目人間墮殻堂舌？”  
「  
だめにんげんだからどうした

『???』

「瞳子・・・お疲れさん・・・良くそこまで、自分の魅力を最大限に引き出して頑張ったな！ オレの負けだ・・・でもお前は本当に偉いよ！・・・ここまで到達するのも、並大抵の努力じゃなかった筈だよな？ 俺には分かる！ 痛い程良く分かる・・・マジで嬉しいよ、お前みたいが一番弟子を持って・・・ 瞳子・・・お前は俺の誇りだ！！ やばい！・・・グスツ・・・嬉しい筈なのに、目から汗がこみ上げてきやがった・・・よりにもよってこんな時に・・・つくづくオレは駄目な師匠だよな・・・可愛い弟子の門出だつてのに・・・」

『いや、ワタシ別に何にも心当たりないピョン、てゆうかワカシいつ、ゆうとに弟子入りしたんだブゥ？』

「はっはっは、瞳子は昔からほんとそっかしいな・・・」ワタシが”ワカシ”になってるゾ？ まあでもこれが、お前なりの精一杯の”照れ隠し”なのかもな・・・」

『話についていけないピョリッん・・・』

「ゴメン、ゴメン・・・ちょっと前置きが長すぎたな・・・反省、反省」



「本題に入るよ、実はな瞳子がこれまで頑張ったご褒美にだ、”松延瞳子さんYUTO流処世術免許皆伝おめでとうパーティー”を、ささやかながら2人でお祝いしたくてね・・・」

『お祝いしてくれるニヨリ!? ワタシ免許更新とか、いまいち良く分からないナリが、なんか楽しそうアル!!』

「こらこら、一部口調がコ 助になってるゾ? ボケ(文字数のムダ遣い)も程々にね・・・」

「実は米戸部駅前にある、高級中華の名店”慢珍楼”に14時で予約を入れといたんだ・・・あゝ、お金の心配は要らないよ? 俺のオゴリだから、好きなだけご馳走するよ! (全部ウソだけどな)」

『高級中華ポ・ポ・ポ~~~~ン      ワタシ中華料理大好きアル~~~~!!      でも14時ってコトはだピヨン・・・あと15分しかないアル~~~~!!?』

「瞳子がこんなに喜んでくれるなんて・・・オレもマジ嬉しいよ! でも、そういえば本当に時間無いな・・・仕方ないから君だけでも、先に行って待っていてくれないか?」

『ゆうつ・・・一緒に行ってくれないナリか?』

「ごめんね、ちょっと野暮用があつてさ・・・でも大丈夫！ 安心して？ 少し遅れるかもしれないけど、必ず駆けつけ（ない）るか  
ら！！！」

『了解アル　そうと決まったらこうしてはいられないナリ！！  
ダッシュで先に行つてゐるアル！！　あちよ～～～～～～！！！！』

びゅん

（あゝあ、ハイスピードで行つちまつたヨ・・・可哀想に、騙されてるとも露知らず・・・）

（それにしても・・・ぶつくく・・・つくづく単純なやつ）

（え？　良心が痛まないかつて？　しゃらくせえ！　そんなモンとつくの昔、どっかに置き忘れてきちまつたよ！！　・・・全くどいつも、こいつも、オンナなんて・・・所詮みんな一緒さ！！・・・クソツタレが・・・）















## 第5話・Little devil & Satan(後書き)

新キャラ( ) 登場しました。これから、ちよくちよく出してこうかと思っています。

それと主人公、最後ちよつぴり”Darkチツク”になりました。

”駄目人間堕殻堂舌?” (だめにんげんだからどうした) に関しましては、

「必殺技」とか「奥義」といった大げさなモノでは無く

あえて「生活習慣」とさせていただきました。

理由は・・・まあ、なんとなくです。

肝心の効果は、必死に演技して、相手を騙くらかすだけという・・・これまた微妙ですね。

まあ、最低な技である事は間違いないですが(笑)

尚、使用後”長時間眠りこける”等の副作用はありません。

「生活習慣」だけに、普段の規則正しい生活を送っていれば、未然に防げる筈ですので・・・

## 第6話・昼下がりの困ったちゃん　その巻

前略おフクロ様、今俺はやっこの思いで教室に辿り着いた所です。ドアを開け中に入ると、何処かクラスメイト達の様子が変なのです。何故だか分かりませんが、教師も含めクラス全員、皆一斉にこちらに注目し出して、ざわつき始める有様です。どうしてこんな状況になってしまったのか、皆目見当もつきません。このまま全く事情が呑み込めず、手をこまねいている訳にもいきませんので、まずは行動を起こしてみようと思います。遠い空で、この不肖の息子を、どうぞ温かく見守ってやって下さい。

追伸………出掛けに持たせてくれた弁当は、とても美味かったです。ただ、出来れば次からは、梅干を抜いてくれると有り難いです。

（クエン酸には不自由してませんので）

現在時刻、午後2時02分

（さてと………そんなじゃぼとぼち行動に移るか………）  
アクション

「うーす、来る途中、獅子舞の格好したグラサンでパンツ丁の、変なオッサンに絡まれて、そんで遅れましたー」

???「死ね！　世の中で俺より顔が良くて、仕事が出来て、金持ち

の奴全員死ね！ ついでにフザケた遅刻の理由を

ぬかすテメエも死にくされ！！ ヲオケエ！！！！

「キツう！」

??「やかましい！ テメエみたいな奴は、今すぐ真っ赤な全身タイツ着て、闘牛場の真ん中に立て！！ そんなタイツ

の色だか自分の血だか分からん位、牛の角で体中突き刺さされてくたばりやがれ！ アホンダラ！！！！

「想像しただけで、アイタタタな話なんで悪いケド辞退させてもらうよ・・・」

??「心配するな、赤タイツはこっちで用意してやる！ スペインまでの片道航空券は自前でなんとかしろ・・・」

等と、俺とのやりとりで、果てしなく人間性に？マークが付くこの男、<sup>しまたに</sup>島谷 <sup>こてまな</sup>固手正<sup>や</sup> 通称”コテツちゃん”、角刈りのヘアスタイル and ”着流し”の中にサラシを巻き、片手で懐の<sup>トス</sup>小刀をちらつかせるという、まるで大昔の任侠映画から飛び出してきたんじゃないかと思わせる年齢29歳、一応この<sup>ヨドイチ</sup>米戸一高の教師（カタギである事を切に願う・・・）である。担当教科は世界史、ちなみに俺のクラス担任ときている。

教室全体が微妙な空気なのを察したらしく、”コテツちゃん”は一旦、小刀<sup>ドス</sup>を引っ込めて俺に問いかける。

「コホン・・・まあさっきのは冗談として、度会おめえ何でこんなトコ来てんだ？」

「へ？ 何言つてんだよ、コテツちゃん？ オレは、学びに来てるに決まってるでしょうがよ！（ただでさえ出席日数やバイんだから・・・）」

「変だな・・・昨日おめえの家に電話したら留守だったんで、FAX送つといた筈なんだが・・・家の人から何にも聞いてないんか？」

（あーそういえば、出掛けにモモちゃんそんなような事言ってたよ  
うな・・・もしかして”コレ”か？）

俺はズボンのポケットから、取り出した四つ折の紙を広げて内容を確認する。

するとそのB5サイズ用の紙には、上から男女別であいうえお順に並んだクラス全員39名分の名前が上半分、下半分には各々（おのおの）の苗字が書かれた座席表などが記載してあった。  
一見すると、別になんの変哲も無いただの連絡事項である。

ただ一つ気になる点を除いて・・・

「度会よ？ おめえ顔色青いぞ？」

「・・・あのさ、質問していいスか？」

「ああ、構わねえぜ、教師は生徒の質問に答えてなんぼのシゴトだからな」

「あんがと・・・じゃ、お言葉にあまえて・・・」

「こつて、  
県立米戸部第一高校一年四組の教室で間違い無いよね？」

「当たり前じゃねえか、何言つてやがんだ・・・」

何故かニヤニヤしながら返答するコテツちゃん。

俺は用紙を傍らに、教室のある一点を指し示しながら

「じゃあ何であそこの席に、見知らぬヤツが座ってんの？ あそこ、オレの席の筈じゃん？・・・つーか、この教室オレが知ってるやつ誰も居ねえし・・・これって、どゆコト？」

俺がそう言つと、コテツちゃんは”お手上げ”のポーズで嘆息し、さも呆れたような口調で

「まったくもって、おめえって奴は・・・」

「な、なんだよ？ 教師は生徒の質問に答えてなんぼじゃないんかよ！？」

「・・・クツクツク、とことん往生際が悪いやつちな、度会よ？ おめえもホントは自分でも薄々気付いてんだろ？ ・・・まあいいさ、この俺様がアホのお前にも分かる様に、説明してやる！ いいか？ よく聞け、お前も知つての通りここは一年のクラスだ！ ズバリてめえは入って来る教室を間違えたんだよ！ 二年四組・出席番号20番 度・会・優・斗・君よお！！！」

「・・・オレのフルネーム  
”二年”と度・会・優・斗を、殊更強調して、教室全体に向け言い放つコテツちゃん。」

「・・・さいですか」

（やっぱしな・・・FAX用紙の上部にしっかりと書いてあるもん

な、”二年四組クラス名簿（仮）”って、これが俗に言う  
休みボケここに極まれりってトコか・・・）

（てか、ヒドクねえ？ 分かってたんなら、オレがココ入ってきた  
時指摘してくれよ！？ ただでさえ、あんなデカイ声で皆に聞こえ  
る様に言われちゃ・・・）

ザワ ザワッ

（ハイ！ もれなくこうなりますね・・・後輩のみんな！ 予想ド  
ウリのリアクション THANKS ！！）

もはや完全な、この場違いアウェイの空気に耐えられよう筈もない俺は、静  
かに教室を出て行こうとする。  
そしてドアに手を掛けたその時、背後から一言。

「待ちな！ 究極天然コゾウ！」

「何ス力？ 、究極変名の”島谷しまたに 固手正こてまさ”大センセ？」

「そっぴゃおめえ、また外靴で校舎に入って来やがったな・・・前  
からあんだだけ口を酸っぱくして、校舎内は”土禁”だって言ったの  
によ？」

「教室内で雪駄履きのアンタが言っなや・・・」

「あ？ もっぺん言ってみろや？」

俺はコテッちゃんに向きなおし

「ああ！ 何遍でも言ってやんよ、ダッセー格好しやがって！ この完全時代錯誤の勘違いドS教師があ！！」

「野郎！」

言うが速いや、コテッちゃんは懷から一瞬で、抜き身の小刀ドスを俺に向けて構える。

そして例の如く場クラスが瞬間に凍りつく。  
すると奴はそれを感じ取ったのか



「なあ〜んちゃって」

とコテツちゃんは、マイナス百万ドルの笑顔で何事も無かった様にドスを引っ込めた。

「もう遅えよ！　ったく何を今更・・・つか、これっぽっちも可愛くないし、むしろアンタのその表情怖えよ！」

するとふて腐れたように

「チツ・・・あー、もうヤメだ！　ヤメ！　度会よ？　おめえのせいで授業ドコじゃねえや！　今日はもう気分が乗んねえから、俺は帰るぜ！」

一方的に言い残し、教室のドアを開けっ放しで、職員室<sup>ホーム</sup>へと帰っていくオレの元担任<sup>コテツちゃん</sup>。

（え〜〜〜〜！？　授業放棄？！　何考えてやがんだ、あのオッサン・・・）

こうして、訳が分からぬまま完全に取り残された形の、俺＋約40名の後輩達。

やがて堰を切った様に、教室のあちこちから声が上がる。

「ありえねえ〜！ 何なんだ、一体！？」

「ああ、先生昨日の入学式でも、あのヤクザみたいな格好してたもんな・・・」

「私、とんでもない高校とこに来ちゃったのかも・・・」

「つーか、ここ県立だろ？ なんてあんなのが大手を振って教師やってんだよ！？ P T Aも教育委員会も何考えてんだ！？」

（まあ、無理もねえな・・・見ず知らずの、お前等の気持ちも尤もつもだ・・・オレだって一年前に全く一緒のことを思ったさ・・・）

『でもあのヒト、スゴくない？ あの島谷先生と互角に渡り合ってたわよ？』

「そうだな、一步も引いて無かったもんな！ とてもマネできねえよな・・・」

「マジ尊敬に値するよ・・・つーか怖くないんかな？」

（チゲーよ！ オレだってかなりビビッてんの！ 成り行きに決まってるんだろ？ じゃなきゃ、誰が好き好んであんなヤクザ教師と・・・）

『あの男<sup>ヒト</sup>確か、二年の”度会”って言つてたわよね？ 教室入つて来た時から、あたし結構気になつてただけどかなりイケてない？』

『そうね、最初ネクタイして無かつたから分かんかつたけど、やっぱセンパイだったんだわさ！ 少しヤンキーっぽいけど、あなたの言う通りかなりの上玉ね・・・』

『でもまあ、あの右耳のピアスはどうかと思うけど、背はそこそこ高そうだし、ああして黙つてればクールっぽいし、容姿<sup>ようさ</sup>だけなら私的にはアリかもね・・・』

「まあ、悔しいけど男の俺から見てもスゲーいい男だよな・・・つか神様不公平だぜ！ 母ちゃんも、オレをもっとイケメンに生んでくれりゃ良かったのによー！」

『てか、あんたも僻<sup>ひが</sup>んでじゃないわよ！ ああ！ でもこうして見ていると、ホントあたしの好みだわあ！ 鼻も高そうだし、なんといつてもあの眼よ！！ くっきりの二重まぶたに蒼みがかつた瞳・・

・ あんな眼で見つめられたらアタシ・・・』  
「カラコンでも入れてんじゃねーの？ じゃなきゃ、あの黒い髪色と全然合わねーべ？」

『うっさい！ アンタ、夢を壊すようなコト言つんじやないわよ！』

「けどさあ、あれはマジウケだな！ フツー、一年と二年の教室間違えないもんなあ・・・」

（クソッ・・・こいつ等好き勝手な事言つてやがる・・・でもまあ仕方ねえか、こんなの今に始まつたコトじゃねえし・・・）

俺は軽くブルーになりながらも、踵を返し教室を出て行こうとする。

『えー！ センパイ、出て行っちゃうんですか・・・？』

『メルアド教えて下さい・・・！』

『彼女はいるんですかあ〜〜？』

（勘弁してくれよ！ どうせこんなの最初だけなんだ・・・今あった事も、あと何日かすれば、みんな何事も無かった様に自然に忘れる・・・この娘<sup>コ</sup>達が惹かれてるのは、あくまでもオレの外見だけさ・・・君等には悪いけど、直にメツキが剥がれるオレに幻滅していく姿がはつきりと目に浮かぶよ・・・だから放つといってくれ！・・・それにもうオレは・・・）

一年の教室を出た後、俺は先刻コテツちゃんに指摘された通りに、昇降口の下駄箱で内履きに履き替える。

（あゝあ、最初っからこうしてれば少なくとも、あんな事にならなかったかも・・・）

下駄箱には、それぞれ各自の使用スペースに名前が書いてある。ましてや、学年ごとにエリアが分散してる為、よほどのおバカさんで無い限り、下足から内履きに履き替える際、なんらかの違和感に自ら気づきそうなものである。

尤も、横着して履き替えたり、そうしなかったりの普段からだらしない自分が招いた結果ではあるのだから。

それと今にして思えば、家を出る際にモモちゃんが弁当と一緒に持たせてくれた、コテツちゃんからの連絡事項が書いてある例のFA

X用紙にも、来る途中に一度は目を通しておくべきだったと、悔やまれるのも後の祭りである。

（そうそう、しっかりと確認しねえと・・・）

俺は本来の二年の教室に向かいがてら、事前に新しいクラスの予備知識を少しでも頭に叩き込む為、改めて用紙を確認する。

（え〜と、おっ！ ラッキー！ またゲンのやつと一緒にのクラスだ、あゝ、去年一緒だった瞳子の名前はねえな・・・あいつが居ると結構退屈しなくて済むんだがな・・・あとの面子は大体が知ってる連中ばかりだな・・・それと、新しい担任は・・・武下先生？ ああ、あの50代のベテラン女教師か、あんまし馴染みがねえが、基本的に生徒思いの優しい先生って評判のヒトだ・・・コテツちゃんじゃ無くてある意味助かった・・・他特に変わったコトはと・・・ん？）

「なにい〜〜！？ ど、どうしてオレの席が教壇のまん前なんだ？・・・」

（サイアクだ・・・初っ端からこれじゃ・・・）

心なしか、階段を上る足取りが重い。

途中、二、三人の同級生たちと無言ですれ違う。

（あゝ、帰ってえ・・・）

そんな事も思いながらも、俺は二階の一番奥にある2年4組の教室

のドアを開ける。

幸いにも、今は5・6限の間の休み時間らしく、中に入って来た俺に注意を向けるヤツは、ほとんど居やしない・・・等。

『おはおう度会君、もうお昼過ぎだけどね』

「ああ、オハヨ・・・」

「よお、度会！ お前昨日どうしたんだよ？」

「寝てた」

俺は、新クラスメイト達との挨拶もそこに自分の席に着く。  
するとこちらに一人の生徒がやってくる。

「優斗！ なんで昨日始業式来なかったのさ～～？ 僕、めっちゃ心配したよ～～！」

「トップシークレット・・・ま、強いて言うなら、”副作用”ってトコだ・・・」

「え？ ”副作用”？」

「知りたいか？ だがな、一度知っちゃったらもう、後戻りは出来ねえぜ？ 何たって禁断の・・・」

「別にいいよ、興味ないもん」

「シヨツツク！ HEY、その少年？ つれないコト言つなよ、  
悲しいじゃんか・・・でも！ 俺、オマエのそういうドライな所  
も大好きだぜ？」

ドゴッ

「ホゲエエエ~~~~~！！」

「あつ、ゴメン・・・」

「「あつ、ゴメン」じゃね~~~~！ なして、コチとら教室  
さ入つてきで早々、イスであだまさ殴られんといげんのよ！？」

「なんかチヨイキモかつたんで・・・てへ」

（まったく・・・軽いジョークに淒まじいツツコミで返してきやが  
つて・・・これ以上頭悪くなったらどう責任とってくれんだ・・・  
）

「・・・・・・・・」

「ねえ、優斗？」

「何か言つたか？」

「いつになったら、僕の人物紹介してくれるの？」

「やなこった！ お前にアタマぶん殴られたショックで、軽く記憶が飛んじまったよ…… だから、無理！！」

「……いいもん、こうなったら、自分でするから……」

「は？」

「皆さん、始めまして！ 僕、”正岡<sup>まごおか</sup>元規”っていいです。ちなみに、あの有名な文学者と一字違いです。優斗とは高校に入ってから知り合いました。僕の簡単なプロフィールは、身長171cm、体重56kg、乙女座のO型です。趣味はたまにギター弾いたり、ゲーセン行って遊んだりとかで、あと最近は、バイクの免許も取りたいなあなんて思っています。こんな感じで、そのへんの同世代とあまり変わらないと思います。苦手科目は特に無く、スポーツも大体そつなくこなせます。自分で言うのもなんですが、人当たりはいい方だと思うので、先生方や周りの友達からの受けは良いと思います。それと外見は人から、某男性アイドルユニットのあの人に似てるってよく言われます。後半、なんか自慢みたくなってしまうってどうもすいません。だいたいこんな所かな……」

「よくもまあ、長々と屈託も無くそこまで話せるな、この自分フェチ男が……」

「やっぱ、最初が肝心かなあゝて」

「まあご苦労さんと言ってやりたいのは山々だが、お前に一つ悲し



知らせがある」

「えっ？」

「クラスの連中は、誰一人としてお前の自己紹介を聞いて無かったんだな、コレが・・・」

「そんなあ」

そんなこんなで休み時間も終わり、その後6限目の授業、帰りのS  
ホームルーム  
HRと無事に過ぎて行き、俺とゲンは下校途中の昇降口付近で、他  
愛の無い話に花を咲かせていた。

「でもホント良かったよ、また優斗と一緒にのクラスで！」

「そんなもん、確率は四分の一じゃねーか？ 米戸<sup>ウチ</sup>一高はただでさえ、全学年4クラスずつしかねえんだから」

「確かに少ないよね・・・ ってそうじゃ無くて！ 優斗は僕と一緒にのクラスは嫌なの！？」

ゲンは何故かこんな不良のオレに対して懷いて？くれてる。お互い全く正反対のタイプにも関わらずにだ。勿論俺にとっても、数少ない大切な男友達<sup>タチ</sup>である事に変わりはない。

「そういう意味で言ったんじゃねーての！ 誤解すんなよ、オレだってゲンと同じクラスで、ホント良かったと思ってるぜ？」担任の武下先生も優しいそうなフツのオバちゃんだったし、ヤクザ教師コテツちゃんとは大違いだしな・・・」

「あの先生もキョウレツだったからねえ（笑）・・・悪いヒトじゃ無いんだケド」

「だな・・・」

「だけどき、瞳子ちゃんと離れ離れになっちゃったのは、ザンネンだったな」去年は三人一緒のクラスだったのに・・・」

とゲンは少し寂しそうにポツリと呟く。

「そつえば、さっきオレ瞳子のやつと校門の所で会ったぞ？」

「え？ほんとに？」

「ああ、5限目の途中辺りだったか・・・なんでアイツあの時間あんな所でサボッてたのかなあ？ ゲン、お前なんか心当たりないか？」

「さあ・・・でももしかしたら・・・」

「ん？ なんかあるのか？」

「これは僕の想像なんだけどき、多分例のコスプレの事じゃないのかな・・・彼女、新しいクラスは3組になったんだけど、その担任結構厳しい先生で、確かに限目ってゆうと瞳子ちゃん達ってその

先生の授業じゃない？　そこで何か一悶着あったんじゃないかなあ．．．」

「なるほどな、考えてみればウチの女子の制服はブレザーに膝下スカートだもんな．．．一人だけ、セーラー服で超ミニのやつが居たらそりゃ、目立って仕方ないか．．．納得」

俺はいつもながら、ゲンの完璧な分析能力に内心舌を巻く。

そうこうしてる間に俺達は、学校創立者の胸像がある中庭付近に差し掛かり

「じゃあ、僕こっちだから　バイバイ！」

と一人駐輪場へと向かうゲン

「ああ、じゃあな！」

「うん！　また明日ね！」

ゲンと別れた俺は、校門を出て僅か50m程のバス停に足向けの。

（そういえばゲンのやつ、チャリ通学だったよな．．．いいよなあ、自宅から10分弱で通える距離のヤツは．．．）

そして俺を含め約二十名程を乗せたスクールバスは、米戸部市内を駅方面に向けて走り出す。

（あとは真っ直ぐ帰るだけ、もう流石にトラブルは起きねえだろ．．．）

俺の漠然とした考えには、半分願望も混じっていた。





第6話・昼下がりの困ったちゃん　　その巻（後書き）

やっぱり、何をするにしても事前にしつかり計画を立て、  
後でちゃんと確認しておくって大事ですよね～～～  
とゆう教訓でした。

某消費者金融のCMとは一切関係アリマセン

昼下がりの困ったちゃん　くその弐く（前書き）

とりあえず、先に謝っておきます・・・・・・・・



## 昼下がりの困ったちゃん　その貳

バスが米戸部駅前のロータリーに入っていく。

停車後、俺はバスを降りて駅構内に向かおうとする。

隣接する駅ビルのすぐ側まで差し掛かるうかという時、後方からとてつもない殺気が俺を襲う。

振り向いた先には・・・

『ゆ・う・と　　』

そこには、鬼の形相したへそ出しセーラー美少女が一人。

おまけにツインテールの髪を両方逆立たせ、背後からは禍禍しい闘気が立ち昇る。

「ゲッ！　瞳子！？　」

『よくもワタシを騙したアルね　　！！　あの後”漫珍楼”に行ったら、「当店では、度会様というお名前でのご予約は承っております　』　って言われたナリよ　　！！　』

「ま、待て！　落ち着け？　話せば分かる！　な？　」

『問答無用　　！！　銀河に変わっておしおきアル　　！！　』  
そう言って、瞳子が鞆から取り出したのは刃渡りおよそ30cmの中華包丁。

「ちょ、ちよつと待て！ お前、その包丁・・・どうしたんだよ？」

「腹いせに、厨房から盗<sup>パチ</sup>ってきたアル」

さらりと言い放つ艶姿窃盗ガール。  
そしてジリジリと俺との間合いを詰めてくる。

「あ、あのう・・・瞳子サン？ その物騒な凶器<sup>モノ</sup>は、出来ればしま  
つてくれませんか？」

「<sup>コテッちゃん</sup>ヤクザ教師とは違った意味での、キ ガイに刃物”状態の瞳子を  
前にして、思わず戦慄<sup>ヘタレ</sup>を覚える俺。」

『覚悟は良いアルか？ アイヤー ！！！』

瞳子は奇声を発しながら包丁を振り回し、俺に襲い掛かる。

「Noおおおおお！！！！」

（マジだ！ マジでオレを殺る気だこいつ・・・）

シュパッ

刃が俺の顔前を掠める。

すると自身の髪が二、三本はらはらと下に落ちてゆく。

「ヒッ！」

情けない声を上げる俺を嘲笑うが如く、第二波の攻撃がアップー気

味に下から繰り出される。

「うわっと！」

間一髪で何とか避けた拍子に、俺はバランスを崩し後ろに尻餅をついてしまった。

（このままじゃ、殺ラレル！、何とかしねえと・・・ それにしてもここまでシャレが通じんヤツだったとは・・・）

（こりゃ、覚悟を決めたほうがいいのか？ ああ・・・ でもアイツ、この位置<sup>アングル</sup>からだ、へそ出しセーラーの下からブラの形がモロ見えだな・・・ あとビミョーに、ミニスカの中のパンティが白っぽいのも・・・ これはある意味ラッキーってか！？）

思わず心の中で念仏を唱えなくなる衝動に駆られながらも、それとは裏腹に、煩悩まみれの思考が俺の脳内を支配する。

（つてそうじゃねえ〜！ バカか！ オレは！？ 余裕ぶっこいてるバイイじゃねえだろうが！？ この状況がどれ程バイイか解んねえのか！？・・・）

俺は脳内全体の約70%を占める、救いよつの無い現実逃避癖を無理矢理追い出して、若干我に返る。  
次に、この不利な体勢を打破すべく

「よっこらせつと・・・」

これで、よつやつと目前の”恐怖の料理人”から逃走する算段が整った。

「I'm stund up!! うゝん、何てスバラシイ響き……」

俺は立ち上がったついでに、尻餅をついた際、スラックスに付いた埃を手で軽く払う。

そして、そんな俺を見て何故か固まってる瞳子から、すばやくから中華包丁を取り上げてこのスペシャルバイオレンスな光景に終止符を打つ。

『キヤー!! 優斗のヒーロー!!!』

（はぁ？ 何言ってるやがんだ瞳子のヤツ……たかが腕を掴んで包丁を取り上げただけじゃねーか……リアクションが大袈裟だったの……）

「おつ、何だ？ 何だ？……!？ あのヤロー!!」

『何かしら？ 何か叫び声がしたけど……え!? 何あの学生……』

「どうした？ どうした？ 何があった!?」

（ほら！ 瞳子<sup>オマエ</sup>が大袈裟に騒ぎ立てるもんだから、野次馬<sup>ギャフラー</sup>が集まって来ちまったじゃねえか……）

「いや、たいしたコトじゃ無いんす！ ちょっとした痴話喧嘩なんデ……ほらっ！ 瞳子<sup>オマエ</sup>の口からも何か言ってくれよ？」

俺は群集に向け必死に弁明しつつ、瞳子を落ち着かせる為、優しく肩に手をやろうとする。

『イヤッ！ 近寄らないでアル！！』

瞳子はまるで汚物を見る様な目つきで、俺から後ずさる。

「えっ？ 瞳子、何言つてんだよ！？」

今気づいた事だが、瞳子だけでは無く周りを取り巻く（野次馬＝群集）全体が、老若男女問わず俺一人に対して敵愾心を露にしているらしい。

そしてよくよく、野次馬一人一人の視線の先を追ってみると、共通して俺自身のある一点に集中している事が分かる。それにつられて、俺も”其処”に目を向ける。すると、そこには……

まるでテントを張ったが如く上に向けてそそり立つ、”ワガママBOY”が、俺のズボンの外側からもはつきりと見て取れる。

「なんじゃこりゃあああああ~~~~~~~~!!!!」

「！！！！」

（屍餅ついて立ち上がったら、あゝらビックリ！ ついでにアソコも stand up ！！ ってかい……………）

『きゃー、ヘンタイよー！！』

「このガキヤ、真っ昼間から何さらしとんねん！！ このクサレ外道が……………」

『イヤだあゝ キモい…………』

「おい、あいつ米戸部一高の制服だよな？……………」

『ホントだ…………サイアク…………！ マジ死んでってカンジよね…………』

（なに…………！？ 野次馬の中に”米戸一高”の生徒が混じって

やがったのか！？…………マズイぞ！ こりや…………）

（でもよ…………それにしたってオレは何故こんなトコ立たしてんだ？ 我ながら全く心当たりねえぞ！？ つーかい加減に治まってくれよ…………オレの体…………？）

俺は、この自分が置かれた状況にまごまごするばかりで、收拾の目処すらつかない。

誰に助けを求めるでも無く、何気に瞳子に目をやる。

そんな彼女は相変わらずの、へそ出しミニの悩殺ルックである…………

（ん？ 悩殺！？）

ふいに数分前の記憶がよぎる。

（あん時、確か…………瞳子の攻撃を寸での所でかわして…………バラ

ンス崩したオレは尻餅ついたんだよな．．．んでもってそのままの  
体勢から．．．へそ出しセーラーの中が見えて、ブラが．．．！  
そうだ！ あとミニスカからの．．．パンチラ！ 成る程．．．  
．．．．．）

何かに例えるなら、ジグソーパズルの空白部分の一つが埋まった様な感覚に至る。

だが、まだ完璧では無い・・・決定的な疑問がのこる。

（そりや、オレだつて健康な一人のオトコとして、至極真つ当な反応でしようよ！？ あんな結構なモンお目に掛かれた日にや・・・生理現象だろ？ 言い換えるならコレは男の性さがよ！・・・なの  
にこの連中と来たら、何を目くじら立ててここまで言い放つ！？  
納得いかねえぞ？！ 元をたどれば、こりや成り行き上の事故だぜ  
？）

「皆さん！聞いてくれ！」

┌ ┌ ┌ ┌ ┌  
└ └ └ └ └  
┌ ┌ ┌ ┌ ┌  
└ └ └ └ └

「先ほども言ったが、飽く迄もこれはオレとこの場に居る瞳子の・  
・云わば一種のコミュニケーションだ！ 従つて、野次馬あんたらに俺等の  
コトをとにかく言われる筋合いは無い筈だ？ 確かに、お見苦しい  
物を見せてしまった点は謝る！ だが、”クサレ外道”だの”死ね  
”だとかってひど過ぎねえか？ どうよ皆の衆！！」

周りが、一瞬静まり返る。

（フツ、決まっただぜ！）

「この鬼畜ヤロウが・・・」

（そうそう、分かってくれたみたいだな・・・正しくオレは鬼畜・  
・って！！ そうじゃネえ~~~~~！！）

『開き直りもここまで来ると、手に負えないわね〜』  
「この変質者が！」

（えっ？ えええええええ！？）

「何故！？ オレは誰にも迷惑掛けてねえだろうが！？」  
罵詈雑言の嵐を浴びせられて、流石に俺も言い返さざるを得ない。

『よく言っわよ！ そんな”モノ”持つて・・・』

（そんな”モノ”って何だよ？ ああもしかしてこの中華包丁の  
コトか？）

「包丁がどうしたよ？」  
俺は声の主と思いき20代後半のOL風に、右手に持つ黒光りして  
る（”アレ”では無い）中華包丁を見せ付ける。

『嫌っ！ そんな凶器近づけないでよ！！』

「いやいやいや！ コレは元と言えば瞳子のヤツが・・・  
あっ！！！！」

（も、もしかして、もしかしくても・・・包丁が原因か？・・・  
・・・）



一旦、整理してみよう・・・

最初に瞳子が中華包丁で、俺に襲い掛かってくる。

俺は避けてバランスを崩し、尻餅をつく。

ここで”第1のポイント”、ブラ見え+パンチラ・・・この時点で”マイジャー”はエライ事に。

やがて、俺は尻餅をついた体勢から立ち上がり・・・え〜と、それから・・・

そつだ！その後俺は自己防衛の為に、瞳子から中華包丁を奪い取ったんだ。どうやらココが、”第2のポイント”らしい

そしたら何故か、俺は野次馬共から鬼畜扱いされちまい、瞳子まで怯える始末・・・

（やっと分かったぞ！　こう言う事か！）

要するに野次馬共には、包丁を持った俺が、瞳子を襲ってる様に映ったらしい。

更に始末の悪いことに、俺は”アソコ”をおっ立たせながら、野次馬共に大演説？をのたまった。

この事が連中の神経を一段と逆撫でして、もはや完全に四面楚歌状態に陥った俺。

俺の脳内ジグソーは今、完全にコンプリートされた！  
そして出来上がりの作品が意味する重要なメッセージ。  
即ち

【容疑者 ” 度会 優斗 ”】

「おいっ！ 誰か警察っ！！」

（早速かい！）

『警察だけはダメ~~~~~！！！！ 優斗が退学になっちゃうプリン~~~~~！！！！』

今まで黙り込んでいた瞳子が、不意に口を開く。

（おお！ 天使降臨！ だが時すでに遅し・・・）

?? 「すみません、ちょっと通して下さい！ なにかあったんですか？」

と、多数の野次馬共を掻き分けて、チャリに乗った一人の警官ポリが現れた。

言わずもがな、俺にとって天敵と言って差し支えない。

「どうもこうもねえよ！ このガキ事もあるうちに、真っ昼間からそっちのお譲ちゃんに乱暴しようとしてたんだよ！！」

代表して一人が答える。

俺も負けじと

「ざけんじゃねえ！　ンなもん言い掛かりに決まってるだろ！  
」

すると、別のオヤジが

「じゃあ、テメエが持つてるその包丁と、おっ立てた”ソレ”  
はどう説明するんδει？」

（What？　あの端役、今何て？・・・・・・あ）

俺は恐る恐る、自分の下半身に目を向ける。

大方の予想通りそこには、相変わらずのやんちゃボウヤが存在して  
たワケで・・・

（オレってば今もこの状態かよ！　つーか何て持続力！？　若いっ  
て素晴らしくネ？）

「はあ・・・」（なんか、これから先を思うと一気に疲れが  
押し寄せてくる・・・）

女A『嫌だわ・・・　ハア　ハア言ってる・・・』

男A「この野郎！　とうとう本性を現しやがったな！！」

女B『いっその事、その包丁でOOOチョン切ったらどうなの？

このヘンタイ男！！』

（なんつー恐ろしいコトほざく！？　この”アベサダ女”（意味が  
解らない方は年配の人に聞いて下さい）め・・・）

俺は決意した。

もうこうなったら、あの方法しかないと！　だがその前に・・・

優斗「みんな！　このオレに1分22秒だけ時間をくれ！！　この間に必ず治めてみせるから！！！」

男B「おもしろえ・・・やってみろや・・・だが分かってんだろっかな？　もしダメだったら、今日がお前の命日だぜ？　なあ！　皆の衆、ひとつここは成り行きを見守ろうじゃねえか！」

群集「・・・・・・・・」

男B「異存は無いみたいだぜ？」

優斗「ワリイな・・・」

一人の漢によつて、周囲は一旦落ち着く。  
これで、この馬鹿げた惨状に終止符を打つお膳立てが整った。

男C「READY~~~~ GOッ！！」

俺は精神を統一し、アスファルトに仰向けに寝転がる・・・

次に目を閉じて体の後ろ全体に地面を・・・前全体に穏やかに降り注ぐ陽光を浴び・・・

イメージはそう・・・・・・・・【天地と一つ】

（あゝキモテいいいゝゝゝ・・・このままなんも考えでゆにオヤセミナスいいい・・・）

脳内BGMはお決まりの

ラン、ランラランランラン　ラン、ランララン

と、スタジオジ　リから、訴えられても知らんぞという読者からのツッコミをよそに、今の俺はまさしく夢心地。

男B「コラア！！」

ゲシッ

男B「やる気あんのか？　ああん？」

優斗「外野は黙ってな・・・」（痛えんだよ！　バカ！　肩をおもいつき蹴ることねえだろうが・・・）

男C「どうでもイイケド、おたく時間ないよ？」

と、何処から用意したのか、ストップウォッチを手に冷淡に言い放つ男。

優斗「残りは？」

男C「36秒・・・」

（それだけあれば、十分さ・・・）

俺には秘策があった。

こういった事態を解決に導くとしておきの切り札・・・  
いきり立つアソコを萎えさせるにはもってこいの呪文。  
即ち・・・

【風呂上りのお母<sup>か</sup>んのハダカ】である！！

誰しも一度は遭遇した事がある筈だ。

誰も居ないと思い、さあこれからひと風呂浴びようかとバスルーム  
の扉を開けた時、鉢合わせた自分の運命を呪いたくなるあのひと時・  
・

水気を弾かないことこの上無い、逆に吸収したんじゃないのかと思  
わせるブヨブヨの肌！

ボンレスハムの様な腕の隙間から、覗かせる不十分な下処理故に、  
はみ出たポーポーの腋毛！

引力に逆らえず、無情にも下向きに垂れ下がる全く張りの無い乳！  
醜く弛みきつた見るも無残なメタボの三段腹・四段腹・五段腹！

e t c . . .

これ等複数の萎え要素を兼ね備えるのは、逆に至難の業では有る。  
だが、俺はあえてそのシュチュエーションをイメージする。

”未来への俺”に向けて．．．（そうしねえと、人生も小説も終わ  
っちゃうモン．．．）

って事でサバイバル開始！

（．．．あれ？ 変だな、気分が萎えんぞ！？ それ所か、逆に  
スнгеエムラムラすんだけど．．．風呂上りの濡れた髪先から、肩  
から腕へと弾く様に滑り落ちるひと雫．．．そして、あの大きな  
程よい弾力のパオオツが、プルンプルン揺れて．．．完璧な腰の括  
れ+股下90センチの長い脚、まさにスーパースーパーモデル並の抜群のス  
タイル．．．全身のフォルムは全く非の打ち所が無く、言うなれば  
これぞ「神が与え賜うた比類無き造形美」．．．．．ヤバッ！オ  
レもう限界．．．．．）

『『『『キヤーーーーー！！！！！！』』』』

俺は複数の悲鳴に驚き、目を開ける。

どうやら、野次馬の内、女共が四方八方まるで蜘蛛の子を散らす様

に退散して行ったらしい。

何故なら、現在の俺は股間に”44口径ビッグマグナム”フォーティフォーを携えているのだから・・・

俺の身体に起こった変化は、確実に先刻より悪化している。

（しもた！ 萎えさせる筈が、逆にアソコが”エレクトリカルボンバイエ”状態やん・・・）

（WHY！？ 【お母<sup>か</sup>んのハダカ】ってこんなちやうでえ〜〜〜！？）

だが、俺は根本的な間違いを犯していた事によやく気づく・・・

そう・・・俺にとっての「お母<sup>か</sup>ん」とはモモちゃんの事である！  
元ミスユニバース世界大会3位の極上美人の真っ裸・・・・・・・・

そして、周囲は絶対零度の空気感。

男B「たいがいにしろや？ ぶつ殺されてえのか？」

男C「・・・あと10秒」

優斗（オレは”エレクトリカルボンバイエ”）発射10秒前なんだがな・・・）

もはや俺には、どうする事も出来ず・・・

男C「・・・ゼロ！」



終に運命の時を迎える……………

男B「これがてめえの出した答か？」

指をポキポキ鳴らしながら、ごっついレスラーみたいな男が言い放つ……

優斗「ああ、とんでも無いモノが出（発射）ちまったがな……」

そこから先はもう……………

しばらくお待ち下さい

ズタボロに横たわる俺が居た訳で……………

辺りを見渡せば、怒りに任せて俺を集団でボコった男達も、何時の間にか姿を消し……………

『これがホントの立ち往生アルネ……………』

「瞳子……………居たな……………ら其処……………のコン……………ビニで……………ティツ……………シュ……………買っ…………………………」

果たして、俺の声がセーラー小悪魔の耳に届いたかどうか定かでは無い。









昼下がりの困ったちゃん　くその忒く（後書き）

「作者何様だよ！」や、  
おまえ

「（前書き部分にて）謝る位なら、最初からするな！！」  
等といったお叱りはごもつともデス・・・」

それと、数少ない貴重な女性読者の方々に、大変不愉快な気持ちに  
させてしまい

大変申し訳無く思っております。

これからは作者自身、気持ちを入れ替えて真摯に取り組んでいく所  
存です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7606d/>

---

トラウマッ子世に蔓延（はびこ）る

2010年10月9日04時19分発行